

低温やけどに注意

低温やけどに気をつけて

低温やけどは、心地よく感じる程度（体温より少し暖かい温度）のものでも、皮膚の同じ部分が長い時間接触していると発生するやけどです。

熱いものに接触している皮膚の温度とやけどになるまでの時間はおおよそ次のとおりです。

44℃では3時間から4時間

46℃では30分から1時間

50℃では2分から3分

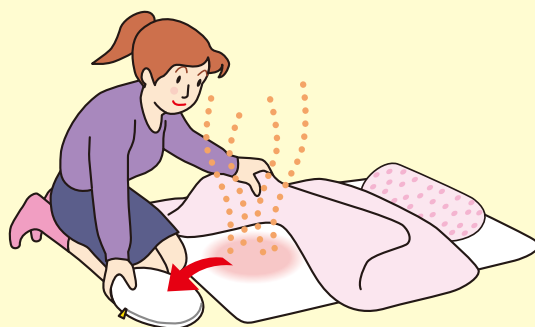
（出典：山田幸生、「製品と安全第72号」低温やけどについて、製品安全協会）



低温やけどを防ぐために

● 布団から出して使用する

布団が暖まったら、ゆたんぽを布団から取り出して就寝すると、低温やけどの危険性はありません。このような使い方をおすすめします。



● ゆたんぽの低温やけど対策用品を使う

低温やけど対策用品が市販されている場合には、それらを使うと低温やけどの防止には効果的です。

● 一定時間ごとにゆたんぽの位置を変える

保護者や介護者など周囲の方がいる場合は、身体の同じ部位に触れ続けないう、時々、ゆたんぽの位置を変えてあげてください。

● 厚手のタオルで包む

必ずしも低温やけどの防止には効果がありませんが、付属や市販しているゆたんぽカバーを使用し、その上から厚手のバスタオルや布で包むと、表面温度が下がるため、低温やけどを生じるまでの時間は長くなります。

低温やけどは皮膚の深いところまで達することがあります。万が一、低温やけど（皮膚の変色や痛み）が起きたときには、すぐに専門医の診断を受けてください。

※SGマーク制度とは、製品安全協会が定めた認定基準に適合した製品にのみ表示され、その製品の欠陥によって発生した人身事故に対する補償制度である。

SGマークシールに表記された期間年数は、補償に対する期間であり、製品の耐用年数を保証した期間ではありません。

必ずお読みください！

湯たんぽの使用上の注意

- 末永くご使用いただくために、お湯はやかん等で沸かしたお湯をご使用ください。直接湯たんぽに水を入れ、ガスコンロ等で直火にかけますと湯たんぽ本体が破損又は変形の恐れがあります。
- 水道水以外の井戸水、入浴剤の入った水、温泉水等は、衛生上問題があるため、使用しないでください。
- 湯たんぽには熱湯を入れますので、直接手を触れずに軍手、ミトン等で持って布製の袋に収納してお使いください。お湯を入れる時には体にかからないように気をつけてください。湯たんぽ袋だけでは熱すぎる場合はタオル等に包み調整してお使いください。
- キャップは確実に締め付けお湯が漏れない事を確認してからご使用ください。パッキンは使用前に確認し、傷・ひび等が無いか確認してください。もし異常がある場合はパッキンを交換してください。湯漏れの原因になります。
- 使用した水は決して飲まないでください。
- 長時間湯たんぽに触れないでください。低温やけどの恐れがあります。また、乳幼児、高齢者、病人、体の不自由な方、深酒をされている方、睡眠薬をご使用中の方がご使用される場合は周囲の方がご注意ください。
- 湯たんぽの使用後は、中の水をよく切って直射日光や風のあたる場所を避け、保管してください。

● 「増し締めのご注意」

湯たんぽ本体にお湯を入れて、お湯漏れがない事を確認したら、キャップをそれ以上強く締めこまないでください。破損の原因となります。

- 湯たんぽは足に直接触れないようにしてご使用ください。また、ファスナータイプの袋をご使用の場合は、ファスナーの引き具は足より遠い位置に置いてください。

- **大変小さい湯たんぽですので**、お湯を入れるときは手にかからないよう、湯たんぽを置いてからお湯を注いで下さい。また小さい湯たんぽなので、お湯がすぐに溢れます。十分に取り扱いにご注意下さい。

湯たんぽ保管収納時の注意

- キャップは締めずに通気をよくして収納してください。

低温やけどについて

低温やけどの定義 …… 低温やけどは、体温より少し高い温度でも、皮膚の同じところに長時間触れると発生し、皮膚の深いところまでに及ぶやけどです。例として物体の温度が31℃の場合、接触面の皮膚温度が40℃になります。その状態で長時間体の同じ場所が触れていると起こるやけどで、湯たんぽに限らず暖房器具には全て当てはまります。

低温やけどの症状 …… 皮膚の内部までただれた状態になりひどい場合は皮膚移植となる。傷跡も残ります。

低温やけどを完全に防ぐには、湯たんぽはお布団を温めるだけに使用し、就寝時は完全にお布団から出してください。



湯たんぽを火にかけますと、大変危険です。本体が破損・変形する恐れがあります。
変形した湯たんぽは、ご使用にならないでください。お湯が漏れ、やけどの恐れがあります。